

第27回

北勢線の魅力を探る報告書

# 秋の東員 神仏の恵みを訪ねて



神田神社



築師堂



途中橋



白峯龍神



多井寺



福泉寺



瀬古泉神社



多奈閑神社



瑞應寺



大雲寺

暮らしを見守る いにしへの神仏たちと出会う実り豊かな東員を歩く

開催日:2016年10月23日(日)

主催:北勢線の魅力を探る会

後援:桑名市、いなべ市、東員町、北勢線事業運営協議会、三岐鉄道株式会社

桑員まちのファンクラブ、都市環境デザイン会議中部ブロック

桑名歴史案内人の会、ふるさといなべ市の語り部の会



第27回北勢線の魅力を探る「秋の東員 神仏の恵みを訪ねて」

参加者 95人

協力 穴太自治会長、薬師堂、多井寺、福泉寺、中村誠さん、遍崇寺住職、  
長深自治会長、瑞応寺住職、大雲寺住職

穴太駅・神田神社・穴太薬師堂

西村 健二

今回の起点となった穴太駅は、大正3年（1914）4月5日の北勢線開通当初から存続している駅です。かつて東員町内に存在した大木駅、北大社駅、六把野駅はすでに廃止され、東員駅は新設駅であることから、創業当初から続く駅は穴太駅が東員町内で唯一です。かつては線路北側にホームがありましたが、平成17年（2005）9月1日に線路南側に駅舎とホームが新設され、駐車場も整備されました。



穴太駅代表挨拶

穴太駅の南側には、昭和56年（1981）12月に建立された穴太地区土地改良区圃場整備事業竣工記念碑があります。昭和48年（1973）11月31日から昭和52年（1977）3月31日まで4年間の歳月をかけて整備され、裏面には土地改良区の理事長佐藤正雄、副理事長伊藤重蔵・種村男雄以下の役員の名が刻まれています。

揮毫は東員町北大社出身で、外務大臣や内閣官房長官を歴任した衆議院議員の木村俊夫（1909～1983、東員町名誉町民）によるものです。



長い列になって歩く参加者

## 神田神社

<神社の沿革>

神田神社の創祀は明らかではありませんが、もともとは誉田別命（応神天皇）を主祭神と

する八幡神社で、八幡宮と呼ばれていました。相殿として武甕槌命・経津主命・天兒屋命・比売神を祭神とする春日神社、須佐之男命を祭神とする八坂神社の2座5柱を祀ります。明治40年（1907）11月4日に穴太の村内に鎮座する山神社（大山祇神）・火産靈社（火産靈命）・八幡社（誉田別命）・弁財天社（市杵島比売命）を合祀し、明治44年（1911）8月29日に筑紫に鎮座する春日神社を合祀したことで社号を神田神社と改めました。なお、拝殿内の「本社御祭神」額には祭神として大日靈貴尊（天照大神）と水速女命（罔象女神）も記されています。



神田神社に着く



拝殿



歴史案内人の伊藤さん

#### <境内散歩>

本殿は南向きに建てられており、南側には参道が設けてあります。かつては門もありましたが、現存していません。参道入口に立つ石鳥居は昭和54年（1979）10月に穴太区有林有権者組合が寄進したものです。脇には村社神田神社と刻まれた社号標柱があり、側面に「大正九年（1920）十一月二十三日祭日謹書 寄附人辻吉次郎一族」とあります。幟台は昭和3年（1928）11月に青年団が昭和天皇の「御大典記念」として寄進しました。

参道には拝殿まで16基もの石灯籠が並びます。そのうち12基は同型で、平成20年（2008）2月に穴太老人クラブ弁天会や長栄会の有志によって寄進されたものです。塀の傍らにある石灯籠は若者中が寄進したもので、「元治紀元甲年（1864）八月建立」と刻まれていることから、境内で最も古い石造物と考えられます。狛犬前の石灯籠は昭和11年（1936）1月に辻こすへが寄進しています。拝殿前の狛犬は平成15年（2003）8月に氏子中によって新たなものが寄進されましたが、台座はかつてのものをそのまま使用しています。由緒碑は平成2年（1990）11月に今上天皇の「大嘗祭記念」として伊藤末雄と伊藤幸博が寄進したものです。なお、今上天皇については、社務所前に「皇太子殿下御降（以下地中）」「昭和九年（1934、以下地中）」と刻まれた降誕を祝う標柱があります。

#### <拝殿と本殿>

拝殿は嘉永3年（1850）2月に再建され、平成26年（2014）10月に耐震工事が施されました。扁額は伊藤秋史によるものです。扉には菊と並矢の紋が大きく彫られており、印象的ですが、拝殿内には嘉永6年（1853）に作られた旧扉の社紋が掲げられて保存されています。なお、屋根瓦には桐紋もみられます。拝殿内にはいくつかの絵馬がありますが、明治

38年（1911）8月下旬に当村宮守一同中から寄進された「日露戦奉天占領之図」が印象的です。

本殿は明治27年（1894）9月26日に再建されました。本殿前には4基の石灯籠が並び、外側2基は昭和11年（1936）10月5日に「紀念」として辻佐市・辻幸七・辻政一・辻文太郎の4名が寄進したもので、内側2基は同じ昭和11年（1936）の1月に「紀念社務所」として当字氏子が寄進しています。社務所前には昭和11年（1936）10月に寄進された小さな石灯籠もあることから、この年に社務所が建てられたのかもしれませんが。また、石灯籠の脇には五輪塔の一部が並べられています。

#### <慰霊碑>

本殿と拝殿の西側には木村俊夫が揮毫した大きな慰霊碑があります。昭和43年（1968）8月に穴太自治会が明治百年を記念して建立したもので、裏面には「護国英霊」として辻正市の書で日清戦争（徳力常照、明治28年（1895）11月2日戦死）から大東亜戦争（伊藤政次郎、昭和20年（1945）5月16日戦死）までに戦死した20名（辻辰郎は公務因死）の名が刻まれています。また、慰霊碑の北側には、平成7年（1995）8月に慰霊碑に漏れた5名の大東亜戦争戦死者の名を刻んだ碑が穴太自治会長辻覚と遺族代表佐藤秋男が世話人となって建立されています。

なお、神田神社境内には穴太薬師堂との境及び本殿東側に昭和5年（1930）3月に架け替えられた弁天橋の親柱が保存されています。



参道



本殿



弁天橋親柱

### 穴太薬師堂

神田神社の西隣に位置する穴太薬師堂の開基は明らかではありません。古くは七堂伽藍を備えた大寺院であり、多くの礎石が出土したと伝わります。東員町瀬古泉の穴太山多井寺はかつて穴太から移転したという伝承をもつことから、この薬師堂の境内地を旧地とする説もあります。

本尊の薬師如来座像は檜の一木造で、平安時代中期の作と考えられています。その左右には脇侍として日光菩薩と月光菩薩、眷属として十二神将が並びます。本尊については、昭和32年（1957）9月25日に三重県文化財調査会の調査が行われ、同年10月10日に三重県の有形文化財に指定されました。境内には、有形文化財指定を記念して同年10月に「薬師

如来坐像」碑、石灯籠、手水石が寄進されています。また、平成 14 年（2002）3 月に三重県教育委員会と東員町教育委員会によって案内板が設置されました。



穴太薬師堂座像碑



薬師堂



説明を補足する自治会長

本堂の換鐘は明治 41 年（1908）2 月に琺瑯鉄器株式会社によって鑄造されたもので、「三重県員弁郡神田村大字穴太薬師院什物 徳峰尼僧代 發起兼世話方（中略）明治四十一年二月初旬鑄造（中略）琺瑯鉄器株式会社」との銘があります。

なお、境内入口には五輪塔が並んでいます。



本堂内



薬師如来座像

途中橋

水谷 仁士

昔、瀬古泉地区は瀬古村と泉村に分かれていた。その泉村に茂平という働き者の男がいた。妻が急に産気づいたので、桑名の馬道の産婆を急ぎ呼びに向かった。ところが東の空が真っ赤です。

「火事じゃ、火事じゃ、矢田礮が火事じゃ。」

その頃桑名の町では毎晩のように不思議な火事があったのです。茂平は産婆さんを迎えに来ていることも忘れてしまつて火事の現場へ駆けつけると、手桶で水を汲んだり、類焼しそうな家財道具の運び出しを手伝っていました。茂平は今にも焼けそうになっている家へ飛び込んで仏壇から仏さんを取り出そうとしました。その時です、後ろから茂平の首筋をぐっと掴んで、

「こら犯人はお前じゃな、どうも怪しいと睨んでいたんだ。お前は何処の人間だ。」

「はい、私は泉村の百姓、茂平という者です。」

「なにっ、泉村の茂平、それじゃ犯人はお前に違いない。泉村の茂平という男は親不孝者の極道だ。お前、こうして家に火を付けておいて、その騒ぎにつけ込んで金目の物を盗んでいるんだろう。」

「ちょっと待って下さい。私は泉村の茂平という者で、女房が産気づいたのでかかりつけの産婆さんを馬道まで迎えに来たのですが、突然の火事にびっくりして何かお役に立ちたいと思い、ここまで駆けつけたのです。」茂平がいくら弁明しても疑いは晴れず泉村の刑場に連れて行かれ、火あぶりの刑に処されることになった。その頃の放火犯は非常に重い罪の刑が科せられていたようです。

一方、桑名では大変な騒ぎが起きていた。ケンカの相手を殺してしまった男を捕らえてみると、和泉村の茂平と

いう者でした。この茂平は怠け者の親不孝者で、これまでもたびたび捕らえられており、厳しい取調べにあつて矢田磔の放火も自供した。真犯人が分かり、大慌てで刑の中止を伝えるため桑名から泉村の刑場まで、二人の役人が員弁川の堤防伝いに早馬で走り、藤川の橋のたもとまで来ると、刑場のある西の空に黒い煙が立ち上り、赤い炎も見えた。

「残念、しまった。」

茂平の処刑は終わっていたのです。桑名役所の役人はそこからすごすごと桑名に引き返した。橋の途中から役人が引き返していったので「途中橋」という名が付いたのです。今はコンクリートの橋ですが、欄干親柱に「途中橋」とはっきり刻まれています。

父の顔も知らずに母に育てられた茂平の息子は、父の悲しい運命を母から聞いてお坊さんになりました。そして一生仏さんの教えを伝えて全国を巡り歩いたということです。

### 白峯龍神社～観音もみじ～多井寺～福泉寺

### 集山 一廣

瀬古泉にある白峯龍神社は集落の中ほどの角地に位置しているが、見過ごしてしまうほどの小さな祠である。

解説資料として配られた「白峯龍神のいわれ」によると、昔、どこからともなく一人の修行僧がやって来て、「そこにある大きな榎木の株元には白い蛇が住んでいるが、それは白龍さんという神様だから大切に祀りなさい。」と言って、そのままどこかに去ってしまった。(中略)



途中橋で説明を聞く



第2次世界大戦前、土佛山から年とった女僧を招き丁寧にお祀りをした。お勤めが終わり、くるりと参拝者の人たちに向き直った女僧は、神がかりになったように全身を震わせながら、「謹んでよく聞け。ここの白龍さんは白峯龍神という尊い神様である。昔はあの西の高い山に住んでいたが洪水でここまで流れつき、ここはええ在所じゃ、と瀬古泉に住みつきなされたのじゃ。皆のもの大切にお祀り申せ。」と言い終わるとそのまま失神してしまった。女僧は少し経って気が付くと晴々した顔になり、何事もなかったように帰って行った。それから村の人たちは祠を建てて、白龍さんを大切にお祀りするようになった。

第2次大戦中の夏、境内の榎木の枝が大きくはびこって周りの家が陰になるというので、村で一番元気がよい男が、「よおし、俺が木の枝を払ってやる。」と鋸と鉋できれいに打ち落としてしまった。あたりは明るくなったが、次の朝からこの男の体が動かなくなった。医者へ駆け込んでみたが、医者は「どこも悪いところはない」という。でも体は依然として動かない。そこでゆかりのあった土佛山に占ってもらおうと「それは白龍さんのお怒りだ」とお告げがあり、改めて祈祷をしてもらった。するとたちまち全身が動くようになったそう。

それ以来、社殿も改築され白峯龍神とあがめられるようになった。毎年2月8日は例祭で多くの信者が集まってくる。



白峯龍神社



内部



中村さんの説明

## 観音もみじ

白峯龍神社からは北の方へ少し戻り、周りが開けたところの田畑の一角をフェンスで囲われたところにある。もみじの木はどこまでが根っこで幹がどこからかは曲がりくねって見分けがつかない。2~3年前に樹木医の見立ての剪定で真ん中の枯れたところを切ってしまう、かつてのようなボリューム感はなくなってしまったのは残念である。ほとんど紅葉しないもみじである。

(東員町教育委員会 表示板より)

広さ 約 50 m<sup>2</sup>、樹齢 約 300 年、胴回り 3.5m、樹高 12m、枝巾 15m

平成 24 年 3 月 29 日に東員町指定の天然記念物に指定された。

もみじの木のそばには古くから観音池と呼ばれる池があった。現在、池は埋められもみじの木が残っているだけだが、さまざまな物語が伝えられ、信仰の聖地として地域の人々に大

切に世話されている。所有者は瀬古泉自治会。



観音もみじ

「続員弁雑誌」によると、ここは往古観音堂の跡であって、織田信長が焼き払ったと伝えられる。仏像は村人が秘匿保存し、現在の穴太山多井寺、通称 瀬古の観音さんに祀られている。目の悪い人が、こんこんと湧き出るこの水で洗うと眼病が治るといい伝えられていたそうである。

### 穴太山 多井寺

瀬古泉の集落中ほどに戻り、かつて村人が秘匿保存していた観音像を安置している多井寺に向かった。

穴太山多井寺は鎌倉時代初期に記された藤原実重の『作善日記』にも「多井の観音」などと記されている古刹で、かつては桑名市の浄土宗光明寺の末寺であったと伝わり、戦後の一時期までは尼僧が住持していたという。しかし、なぜかその頃に臨済宗妙心寺派に改宗する。さらにどういうわけか、古くから伝わる『多井寺』ではなく、『大井寺』という寺名で登録されて現在まで続いている。



本堂



御前立千手観音菩薩

その後長らく無住となったので、同派の 別寺院の住職が兼務住職となっていたが、今から 17 年ほど前に長深の瑞応寺の現住職が兼務住職として後を継ぐこととなり、現在も御開帳などの法要を執り行っている。8 月 10 日に固定されていた秘仏御本尊の御開帳日も、現在は瀬古泉区の自治会によって日程が調整され、大体 8 月 10 日近くの日曜日となっている。

本尊の千手観音菩薩は行基作と伝えられており、脇段には小野篁の作と伝えられる延命地藏が安置されている。2つの仏像とともに地域の人々に大切にお祀りされている。

## 笹尾堂 福泉寺

同じく瀬古泉集落の中にある浄土真宗本願寺派 笹尾堂福泉寺は開基、創立とも明確でないといわれる。

「岩田家安永屋由緒之事」という文書に、「先祖は青木駿河守平安豊という、山田村の笹尾城主であり、滝川一益に攻められて戦死した。男子 3 人は母方の実家の岩田家の姓を名乗った。この家は瀬古泉の出身、本姓は中村氏で福泉寺の旦那である。云々」

寛文 10 年(1670)付の本尊木札の御札が残されており、その折寺号の公称も許され安豊に係りのあったものが笹尾堂の堂守をつとめていたと推定され、山号を笹尾堂としたとある。本堂の祭壇や欄間はきらびやかで、内陣の格天井には植物の天井絵が華やかである。

本堂左手には、瀬古泉出身の武術者、教育者であった大高重義の石碑と墓がある。通称は兵蔵、号は甲斎と称し、父は中村兵次で、姓を中村から大高に改めた理由は不明。幼い頃から武芸を好み、江戸で 12 年の修行、弓術も修めた。修行後は故郷瀬古泉村に帰り、剣術道場を開き、剣術の他にも読書などの指導もした。また俳諧も嗜み、その方面でも有名だったと伝わるが、残念なことに作品は遺っていない。各方面から教えを乞う者が集まり、弟子の数は 300 名を超え、名声は近隣に響き渡ったという。



福泉寺山門



大高重義の石碑と墓



鐘樓の石積み

当時の私塾は一定の月謝をとらず、どこも経営は苦しかったようであるが、重義はそれに輪をかけて経済的な事に無関心であつたらしく、教えを乞う者があれば、誰だろうと分け隔てなく自ら教えたという。その為からか老後は日々の食事も困る程に経済的に困窮したというが、80 歳になっても健康で気力旺盛、よく子弟を指導し、明治 19 年(1886 年)10 月 12

日に天寿を全うした。

梵鐘は天保 7 年(1837)桑名住の広瀬興左衛門藤原政次によって再鑄造されている。鐘樓の石積みの美しさは見事というほかない。



本堂祭壇



内陣の天井画



内陣の壁画

### 瀬古泉神社

市川 幹人

瀬古泉神社は、拝殿の横から直接本殿前まで入られるようになっており、皆さん本殿前まで入ってお参りされた。

瀬古泉神社は、旧瀬古泉村にあったいくつかの神社が合祀されて現在に至っている。

瀬古泉村は、かつて瀬古地区と泉地区にわかれており、瀬古地区には字出口に天満宮（後に菅原神社と改称）、字野田に山神社があった。泉地区には、字東街道 に山神社とその境内社として秋葉社、そして、字釈迦堂というこの地には元々牛頭天王社（後に八坂神社と改称、祭神も須佐之男尊とされた）があった。

明治 21 年、この地にあった八坂神社は、天照大神 を合祀したので、「和泉御厨神明社 [いずみみくりしんめいしゃ]」と改称した。さらに明治 40 年 1 月 8 日には、明治政府の神社合祀令により翌年、明治 41 年 2 月 7 日（三重県神社史桑員史）に、和泉御厨神明社を含めて先述した旧瀬古泉村すべての神社が、かつての隣村であった旧山田村の鳥取山田神社に合祀された。ただし、合祀後もこの地は遥拝所として存続した。



瀬古泉神社鳥居



拝殿



説明する筆者

戦後、かつての神社合祀令に反発する動きが各地に起こり、昭和 26 年 3 月 15 日に鳥取

山田神社より旧瀬古泉村にあった全ての神社がこの地に戻されて合祀されたので「瀬古泉神社」となって現在に至っている。

## 花戸山遍崇寺を訪ねて

伊藤 宜毅

瀬古泉神社を出て、員弁川に架かる念仏大橋、養父川に架かる念仏小橋を渡り、遍崇寺に向かいました。

遍崇寺は真言宗大谷派にあって、開基は、天平年中（729～749年）行基によると伝えられている。本は天台宗、そして明応年間（1492～1500年）花戸城主坂太郎左衛門が戦いに敗れ、当時この地を布教していた室町時代の僧蓮如の教えに帰依し、本山に参詣し、阿弥陀如来の絵像を拝領して帰郷、ここに寺の名を遍崇寺と名付けたのです。



山門



本堂

境内の経蔵には明治20年（1887年）第10世花山大権師が研究資料として購入した明版大蔵経が所有されております。ここで、私事で恐縮ですが、当寺の門徒として寺関係者の方には、大変お世話願っている次第です。本日多忙なお出まし願って、会員に丁寧な解説を頂いた当住職花山孝真様には感謝と敬意を表す次第です。平成の大修復をし、名実ともに立派な「遍崇寺」が輝いたのであります。現在、門徒宗を中心に本堂にて月1回の勉強会を開催し、1年半を経過したところです。住職を師とし、25名の生徒は「真宗入門」を教材として、励んでいる処です。



経蔵



説明する住職

## 多奈閑神社

水谷 仁士

延喜式神名帳に伊勢国員弁郡十座の一つと数えられていた。祭神は天日鷲命（あめのひわしのみこと）、天照大神（あまてらすおおみかみ）他である。

主祭神の天日鷲命は、『日本書紀』によると天照大神が天岩屋に隠れた時、天児屋命（あまのこやねのみこと）が祝詞を奏して招き出すことになり、岩戸の前に真坂木（まさかぎ）を飾り、その上の枝に鏡、中の枝に曲玉（まがたま）、下の枝に木綿（ゆう）をかけたが、その木綿を作ったのがこの神とされている。そして、後の天孫降臨の時に木綿作りとして従い、神武大和進駐の際は伊勢の国神伊勢津彦と交渉し、その土地を献上させた功績により伊勢の国造となったとも言われる。

春と秋の大祭には設置されている屋形に提灯が飾られるが、片側が武者、片側が久米神社となっている。これは明治40年から42年にかけて、中上の鼻戸御厨神明社・八坂神社・山神社三社、鞆尾神社（桑名市友）、中河御厨神明社（桑名市坂井）、平田御厨神明社（桑名市赤尾）が合祀された時、ここ中上地区は久米村大字中上であったので、久米神社と命名されたためである。

参道の坂道の両側には数多くの燈籠が建っている。これは平成5年から平成22年にかけて、その年に還暦を迎えた人が協力して建立したもので、大晦日31日の夜から翌明け方にかけて一斉に灯が点される。1年に一度、この神々しい光景をご覧になって、幻想的な気分になりたい方は、是非どうぞ。



燈籠の続く参道



参道階段



境内



説明する筆者

## 瑞応寺

予定より随分遅くなってしまった一行を、ご住職は本堂の戸を開けて立って待っていて下さった。まずは、参加者の皆さんのここまでの労をねぎらって頂き、ご住職自らユーモアを交えた解説を始めて下さった。

長い参道をずーっと行って瑞応寺。段々上がって大雲寺。膳を並べて善正寺。ついでに、いなべ市藤原町の聖宝寺は、雨がしょぼしょぼ聖宝寺。近隣ではこのように呼ばれて親しまれているとのことだった。

当寺は、長深城主富永氏一族の菩提寺である。前身は、二代長深城主である富永富継が、初代富春の菩提を弔う為に開創した富春院で、現東員町中上地区の田辺という場所（現多奈閑神社の辺りか）に在ったという。

三代城主富輝の頃、叔父にあたる池田春忠（通称：池田入道）の乱暴狼藉に耐えかねた



鐘楼門

家臣達は、富輝の許しを得て殺害した。ところが無念の死を遂げた池田入道は、隻眼の大蛇の怨霊となり、富輝や家中の者達を日々苦しめた。

富輝は、かつて京都で任にあたっていた頃に知り合った、妙心寺の高僧景川宗隆 [けいせん そうりゅう] を頼った。池田入道の怨霊を鎮め、菩提寺の開山として迎えたいと懇願した。既に『禅は景川』として日本各地に知れ渡るほどの有名な高僧であったが、富輝の願いを聞き入れた。

景川の出身は、ただ伊勢國とだけ伝わっているのだが、ここ長深の地には、景川が幼少期を過ごしたとする伝承があることから、故郷である長深に対する思いもあって招きに応じたとも考えられている。景川は、池田入道に『遠林久公侍者禅師 [おんりんくきんじしゃぜんず]』の戒名を与え丁重に供養をすると、二度と大蛇の怨霊が出ることはなくなった。

文明 2 年(1470 年)6 月 22 日、富輝は池田入道を含めた富永氏一族の菩提寺として、中上の富春院をこの地に移し、慈恩山瑞応寺と称して開創した。開山一世には景川、本尊には平景清の念持仏だったと伝わる快慶作の千手観世音菩薩を祀った。

その後最盛期には塔頭寺院を七箇寺持つほどに栄えたが、天正 2 年(1574 年)（一説に永禄 11 年）の長深城落城の兵火により当寺も焼失した。四代城主富知 [とみとも] は尾張へ落ち延び、万治 3 年(1660 年)に当寺第 5 世の宝楠宗勝により茅葺の本堂が再建されるまで



瑞応寺の金ぶっさん

の100年近くは荒廃したままであった。その後200年ほど耐えた茅葺の旧本堂は、明治28年(1895年)9月に第10世雲那周雅によって現本堂へと建て替えられた。

当寺で現存する最古の建築物は鐘楼門であるが、長い間正確な建築年代が不明であった。ところが、15年程前のある日の朝、三重県から優れた近代建築物100選の本堂としてこの鐘楼門を入れたいので、建築時期を教えて欲しいと問い合わせがあった。その昼、ご住職が本尊の厨子を拭き掃除していたら、厨子の裏に棟札があることに気づかれた。これがなんと鐘楼門の棟札で、第10世雲那周雅が棟梁伊藤助蔵長廣に依頼、明治12年11月21日に落成したことや、多数の世話人の名前も判明したということである。



本堂



説明する住職

鐘楼門内部の梵鐘は、現在のもので三代目である。初代梵鐘は、天正年間の長島一向一揆の折に砲弾の弾へと変えられてしまった。二代目梵鐘も太平洋戦争時の金属供出で失われた。現三代目の梵鐘は、昭和23年10月に当寺第12世大泉正直が桑名市の鍋吉鋳造所の鋳物師伊藤軍市郎に依頼したものである。

当寺入口右側には「瑞応寺の金ぶっさん」と呼ばれる青銅製の如意輪観世音菩薩が祀られている。当寺第10世の雲那周雅が、明治38年(1905年)10月16日に27歳で亡くなった長男玄璋の三回忌に、桑名の鋳物師辻内善平に依頼したものである。当初は、もっと本堂に近い所に安置するつもりであったが、道行く人々がお参りしやすいようにした方が、人々の為にも良いだろうということで、現在地に祀られることになった。

当寺本尊の木造千手観世音菩薩立像は、正月、盆、彼岸と檀家の法要時以外には閉扉されている秘仏である。平景清の念持仏というのは伝説としても、快慶作という事に関しては、当寺古文書や本山である妙心寺の記録にも記載されている等、信憑性は高いということである。長い歳月により傷みは激しく、片腕が落ちてしまっているほどだったが、今年の彼岸に修復がなされ、現在のような立派な姿に復元された(ご住職曰く、「なかなか手



千手観世音菩薩立像

がつけられなかったが、ようやく手をつけた」とのことで一同笑い)。文化財としても貴重であるとも思われるが、残念ながら江戸期の適当な補修がたたって、文化財指定は受けられないとのことであった。

本尊右には立派な木製の景川宗隆座像が安置されている。詳細は不明であるが、製作年代は室町時代と伝わる。後述する肖像画に比べてずっと若々しい、働き盛りの頃の姿を写しているとのことである。

三重県指定有形文化財である「絹本着色景川和尚像」は、景川宗隆の最晩年の肖像画（頂相）として伝わっている。亡くなる直前の明応 9 年(1500 年)の春に描かれたもので、一説には、景川の体調が思わしくなくなった時、当寺関係者の請願により賛を遺してもらったとされている。現在は傷みから防ぐため一般公開はされていない。

その他境内には、平成 24 年 2 月 26 日に植樹された「二代目景清松」がある。景清松は、かつて長深に住んでいた景清手植えの松だとも、景清の墓に誰かが植えた松だとも言われていたが、昭和 50 年代に枯死してしまった。この二代目景清松は、直接初代と関係しているわけではないが、この地域に残る景清松の伝承を後世に伝えたいという地域の思いから、二代目として景清ゆかりの当寺に植樹された。尚、在りし日の初代景清松の写真は本堂内に掲示されている。



五輪塔

境内にある歴代住職の墓所の脇に、いくつかの石や五輪塔が祀られている。これらが富永氏一族の墓と伝わるが、どの墓石が誰のものなのかは不明である。織田信長の支配下にあつて、かつて敵対した城主一族を供養し続けることが憚られたのか、あえて小さな墓で祀って気づかれないようにしたのではないかとのことであった。

また、阪神大震災の時、この辺りは震度 4 であったが、本堂内の景川宗隆の位牌がパタンと倒れた。衝撃で位牌の表面がすこし剥がれて、景川の戒名の下から富永氏の戒名が現れたという。これも、信長を恐れたため、開山を供養しているというふりをして、富永氏の供養も続けていたということなのではないかとのことであった。

最後にご住職、「これから昼食をとってもらう本堂内には、これみよがしに箱が置いてあるが、無視して下さい。無視しない方がいいのは、来月の選挙で、二度目以降の当選を願う方だけです。賽銭箱、再選が叶うということで」と一同大笑いで締めくくって下さった。

今だけ特別に開扉して下さっている御本尊に見守られながら、短めの昼食時間を過ごした後、本堂西側の裏参道から次の丸山地蔵堂へ向かった。

瑞応寺歴代住職

開山 景川宗隆

応永 32 年～明応 9 年 3 月 1 日示寂

第2世	不詳
第3世	文華玄郁
第4世	不詳
第5世	宝楠宗勝
第6世	辨嶺如訥 延享 5年 1月 11日 示寂
第7世	文交如謙 寛政 4年 12月 9日 示寂
第8世	泰恩義堪 天保 4年 9月 16日 示寂
第9世	曇溪元浩 明治 8年 8月 9日 示寂
第10世	雲那周雅 明治 41年 1月 2日 示寂
第11世	泉峯還道 大正 13年 12月 2日 示寂
第12世	大泉正道 平成 9年 5月 27日 示寂
第13世	景山法道 現住職

### 丸山地蔵堂

瑞応寺を後にした一行は、すぐに丸山地蔵堂と呼ばれるお堂に着いた。このお堂は瑞応寺と関わりが深く、既に瑞応寺ご住職に解説して頂いていた。

はっきりとした歴史は明らかではないが、その昔「トミナガエッサン（漢字は不明）」とおっしゃる方が個人的に地蔵菩薩をお祀りし、堂守を勤めていた。その後、地域の地蔵堂としてお祀りして管理することになり、明治からは瑞応寺の住職が供養するようになったという。現在地には、昭和17年頃に移されてきて、平成5年4月には新しく建て替えられた。現在も長深地区の方々及管理され、月に一度、瑞応寺のご住職が法要を行っている。

堂内は中央に富永氏ゆかりという地蔵菩薩が祀られているそうだが、普段は厨子の中に安置され閉扉されている。両脇の二体の地蔵菩薩は、地域の地蔵とのことである。

また、立派な位牌も祀られており、向かって左から、  
『富春院殿前筑州太守全我海勝公大禅定門（初代城主・富永富春）』  
『寶樹院殿前筑州太守海心福公大禅定門（三代城主・富永富輝）』



丸山地蔵堂



堂内

『當院中興泰恩堪和尚禪師（瑞応寺第八世住職）』

『玉桃院殿前筑州太守仁溪壽公大禪定門（二代城主・富永富継）』

となっている。他にもいくつか位牌があるが、詳細は不明ということである。

軒先にある半鐘は、

『明治十一年 寅八月 伊勢國員弁郡長深村 富春院 什物』

と彫られている。この『富春院』という寺名が明治期に現れることについて、瑞応寺ご住職も不思議に思うとのことであったが、丸山地蔵堂の前身は、『富春院』という寺名の寺院であったのかもしれないということであった。

この場所では改めての解説はせず、ほんの少し立ち寄った後、お堂裏の細い路地を抜けて大雲寺を目指した。

長深城主富永氏

初代	富永富春	文和 2 年(1353)没	富春院殿前筑州太守全我海勝公大禪定門
二代	富永富継	正長 2 年(1429)没	玉桃院殿前筑州太守仁溪壽公大禪定門
二代弟	池田春忠（池田入道）		遠林久公侍者禪師
三代	富永富輝	大永 2 年(1522)没	寶樹院殿前筑州太守海心福公大禪定門
四代	富永富知		

## 大雲寺

岡本 浩平

瑞応寺の本堂をお借りして遅くなった昼食をとったあと、最後の目的地大雲寺に向かった。本堂で18代御住職に説明をしていただく。

国司太山高安の子、高吉が16歳で出家して京都の東福寺で修行し、観応年中（1350～52）に故郷へ帰って南松院として開山した。当時は天台宗であったが、明応年間（1492～1500）に真宗高田派の



大雲寺山門



本山が関東の高田（現栃木県真岡市）

から伊勢の一身田へ移されたとき、高田派となった。

寛永12年（1635）桑名藩主松平定綱が当寺の本尊「七難消滅」の阿弥陀如来像に参詣、大運寺の称号を賜った。後、「運」の字を「雲」に改めた。

「東員町の民話」(平成15年東員町教育委員会発行)に紹介されている「大雲寺の白へび」が15代の後室にかわいがられて作ってもらったという木の箱が本堂の隅に飾られていた。

住職の説明を聞いた後、大雲寺で解散となり、大雲寺からは長い道を北勢線の東員駅へ歩いた。東員駅南の休耕田を利用した広いコスモス畑は今は盛りで、好天に恵まれた秋の一日であった。



説明する住職



第27回北勢線の魅力を探る 報告書  
「秋の東員 神仏の恵みを訪ねて」

編集・発行：北勢線の魅力を探る会  
代表：近藤順子

連絡先：いなべ市員弁町大泉732

TEL 080-3073-3313

E-mail j-kondo@cty-net.ne.jp

発行日：2016年12月11日

本報告書の著作権は上記発行者に帰属しています。  
ご利用の際はご一報ください。

ブログ：<http://blog.canpan.info/hokuseisenn/>